

白山ふるさと文学賞

第十四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生 小説の部 優秀賞

「へこころの休憩所」ハーブがつなぐ絆

鶴来中学校一年

金谷^{かねや}

光優^{みゆ}

1 愛花

私は愛花。(あいか) ちよつと頭いい中2の女子。「おはよ！昨日のアニメ見た？あれめっちゃ面白かったよね！」こっちは優花。めっちゃ元気なスポーツ得意すぎる女子。私たちはこの世で一番といってもいいくらい仲が良かった。好きなアニメもゲームも食べ物も一緒。知り合ったのは中学に入ってからだけど、共通点が多いことが分かってすぐに意気投合した。周りからも「愛花と優花ってホントに仲いいよね。そんな友達あこがれる！」「いつも一緒にいて飽きないって感じするよね。うらやましいな。」って言われるくらいだ。

私たちはもうすぐ〈地域の伝統〉をテーマに社会科見学に行くことになっている。今日は自分たちの班のメンバーと一緒に、その地区をどのように回るか足取りを話し合う時間だ。私の班には優花と海斗(かいと)、陸(りく)、麻希(まき)がいる。「みんなが納得するような結論になるようによく話し合ってください。結論が今日決まらなくても、来週の月曜日もあるので心配しないでくださいね。それでは始めてください。」先生の声で話し合いが始まった。真っ先に意見を言ったのは優花だった。「やっぱり安全第一だし、みんなと一緒に順番に回っていくのがいいと思う！」「たしかに班で来てるんだから誰か一人がいなくなったりしたら困るもんね。僕は賛成だよ。」陸も同じような意見のようだ。「でも、それだとあまり情報が集まらないんじゃないか？時間もあまりないし、全部回れるかはわからないよ。」と海斗が言った。「確かにそうだよ。どうすればいいかな？」麻希も同じようだ。その時私はいいアイデアを思い付いた。「だったらさ、5人もいるんなら一人一人手分けしていけばいいんじゃない？そうすれば効率よく回れるよ。」「そうだけだし、1人だったら危なくない？危険だからやめといたほうがいいと思うよ！」優花は納得がいかないみたいだ。「でも、全員で同じところ回ってたらやっぱり時間足りないよ。それだったら別れたほうがより勉強になるんじゃない？集合

場所と時間さえ決めればいいんだから。」「なんで？じゃあこの中の誰かがいなくなってもいいの？そんなわけないよね！？やっぱりおかしいよ！」「ちよつ、一旦落ち着けて！」「立ち上がった優花を海斗が止めた。『っ！』大体さ、愛花自分の意見押し通そうとしてるんですよ！」「そんなこと言ったってそっちこそ声荒げてさ、一緒じゃないの？」「なんで否定から入るのさ！やめてよ！やっぱりほんとに嫌いだっただけでしょ！」「そうじゃなくてさ。ただ意見に対して言っただけなのになんで私自身まで言ってくるの？ちよつと落ち着いてよ。」だんだんヒートアップしていく私たちを周りは止められなくなっていた。「はいそこまでです。また次もあるので自分の意見をもう一度よく考えて次の話し合いに生かしてください。」気づいたら終わってた。私たちの班の間には、なんだか嫌な空気が流れていた。

私は家に帰って反省した。確かに言い過ぎたかもしれない。なんであそこまで言っちゃったんだろう。ほんとにダメだな私。いやでも向こうが声荒げたのが悪いのかな。そんなことないよね。自分が悪いんだよね。でもこれからどうすればいいんだろう。いろんな考えが頭の中をぐるぐる回ってた。「ごはんできたよ。」お母さんの声だ。今日の夕食は、鮭の塩焼き、サラダと漬物、みそ汁とご飯だ。いつもなら割と早めに食べ終わるのに、今日は箸が進まなかった。お母さんも心配して「大丈夫？何かあったの？」って言うてきた。「うん。別に何も無いよ。ちよつと食欲なくしちゃっただけだから。」って言うて、自分にも言い聞かせて、無理やり箸を進めた。宿題してる時もずっと頭の中がぐるぐるしてた。なんか頭が痛くなってきた気もした。とつとと終わらせて早く寝よ。寝たら嫌な気持ちも忘れるよね。そう思っ

ていつもより早く寝た。

朝、すぐ目覚めが悪かった。なんか昨日より頭のぐるぐるが激しい気がした。学校の支度を済ませた後、とてつもなく重い自分の心を抱えながら嫌な気分で行った。学校に着くころにはもう半分く

らしい人がクラスにいた。優花もいたけど、話しかけられる気分ではなかった。というか、なんて言ったらいいか分からなかった。なんだかすごく気まずい。「愛花おはよう。やっぱり昨日のことで落ち込んでるよね。」麻希が言ってきた。全くもってその通りだ。「大丈夫だって。愛花ならきつとできるよ。一回話しかけてみれば楽になると思うよ。」って言ってたけど、なんか気まずすぎて無理だった。授業終わった後の部活でも、帰り道でもずっと考えてた。どうやったら仲直りできるんだろう。よく考えてみればあの日優花は言い過ぎって思うところもあったけど、客観的に思ったことを言ってた。別の面で思ってたことを正直に言ってくれた。それなのに私は全部とがらせて跳ね返した。こんなんじゃないや誰のことも受け入れられないや。どうやったらこれが直るんだろうな。はあ。でも、明日休みだし。早く寝ちゃおうかな。そう思って今日も眠りについた。

次の日は気分転換も兼ねておつかいに商店街へ来た。いつもここにおつかいを頼まれている。お菓子買ったりもしてたけど、今はそんな気分じゃない。おつかいを済ませて歩いてたらある店が目に入った。見たこともない店だった。〈ココロの休憩所〉という看板がある。ここ、空き地だった気がするのにな。「あら、どうしたの？何か嫌なことがあったみたいけど。」店主に見える若い女性の人が話しかけてきた。なんで嫌なことがあったって分かるんだろう。「まあ、とにかく入って。」「あ、はい。」中はすごくきれいなカフェだった。他と違うのは1人か2人用って思うぐらいこじんまりしているのと、緑が多いなって感じることだ。「私は心愛（ここな）。ここはカフェでもあり、心のお悩み相談所なの。私、悩んだりしてる人の心が少しでも軽くなったらいいなと思ってここに〈ココロの休憩所〉を開いたの。」「そうなんですね。」「ところであなたは？よかったら話聞かせて。」「あ、私は愛花って言います。えっと…」私はあの日の出来事をすべて話した。なんか驚くぐらい正直な気持ちですらすらと出てきた。「うんう

ん。それで対立しちゃったんだね。たしかに、友達の中でも意見が分かれて喧嘩になるなんてことはあるよね。」すごく優しい感じで、否定的な感じがしなかった。「ちよつと待っててね。」そういうと心愛さんは奥のほうのキッチンへ行った。しばらくすると戻って来て、私にハーブティーを差し出してきた。強めの香りを感じた。甘めの奥に苦みがあつて上品に感じた。「これはラベンダー。リラックス効果があつて、落ち着きたいときにぴったりなの。」「なるほど。」ちよつどいになつて思った。もう一口飲んでみた。「もし、意見が分かれたりして対立したときは、一回立ち止まって考えてみるの。向こうはどんなことを思つてああ言つたんだろうな、自分は今何を伝えたいんだろう。頭の中をフォルダ分けするみたいに整理してみるの。そうしたら、自分なりの結論が見えてくると思うよ。」自分なりの結論か。今は少し気持ちが落ち着いていた気がするし、家で一人になつて考えてみよう。なんだか次への道が開いたみたいで、金属の塊みたいに重かった心が嘘みたいに軽くなった。「ありがとうございました。すごくすっきりしました。」「よかった。また困ったりしたらこのこと思い出してみてね。」「はい!」私は帰り道でこれからなんて言おうかなって考えながら歩いていった。

月曜日、学校に着くともう優花がいた。そしてすぐに「あの時はごめん!」「あ。」ってシンクロした。なんか面白くて笑いがこみあげてきた。ひとしきり笑った後、私は言った。「あの時ちよつと責めるような言い方してごめん。確かにあれは完全に押し通そうとしてたよね。優花は自分の意見をはっきり言ってくれてただけなのに。ごめんね。」「こつちだつて!声荒げちゃったし。それこそ自分も強く言いすぎてた。話し合いの前にめっちゃ考えて思いついたアイデアだからってついうれしくなつて、自分勝手に進めてた。感情的になっちゃってた。ごめん。」「お互い言いたいことは言い合えた。」「私たちなんでこんな急にすんなり言えたんだろ。前は全然言えなかったのに。」「それっ

てき、二人ともへこコロの休憩所へ行ったからじゃない?」「え? 何で知ってるの?」「私愛花のことあの商店街で見たんだよね。」そう言つて優花は自分のその時の気持ちや出来事を話してくれた。

2 優花

なんで自分つていつもこうなんだろう。これだから自分が嫌いなんだ。すぐ感情任せになつてあーだこーだつて言つちゃうし。あんなこと言わなければよかった。でもああいった愛花も悪いのかな。あーもうわかんない。なんにもわかんない。誰か助けてよ。頭痛くなつてきた。お姉ちゃんも言つてたな。「あんたよくちよつとイラついたらすぐ感情的になつて言葉に出すよね。まあそうやつてストレスを逃がしてるんだと思うから、優花なりの方法なのはわかるよ。でも、その方法や人によつては傷ついたりするからちよつと気をつけんな。落ち着けー!」つて自分に言い聞かせて家に帰つてから私に愚痴言うとかでもいいから。愛花ちゃんもそのことわかつて傷つけないように明るく話してくれてる。最高の友達や。大事にせんなんよ?」この言葉が自分にはちよつと刺さつてた。でもすぐ忘れてまたこうなつちやつた。どうしようもないな。そもそも落ち着け!」つて言つたつて落ち着くようなもんじゃなかったし。ほんとにどうすればいいんだろう。ただいまとも言わずに、ゲームも何にもしないで部屋にこもつてる自分を見て、お姉ちゃんが「大丈夫そ?」なんかつたの? 話聞くよ?」つて言つてきた。まあさすがに心配するよね。いつも元気なのはこのテンションの下がり方だったら。「なんもない。」つて適当に返した。「ほんとに?」なんかあつたらほんとに相談してや?」めつちや心配してるけど、お姉ちゃんに迷惑はかけたくない。何にもする気起きなかつたけど、宿題はやらなきゃだからしたし、最低限のことだけして寝た。寝て忘れたかつたけど、頭の中ではずっともやもやが広がつてた。気づいたら朝だった。もやもやは昨日より大きくなつてて、すんごく疲れてた。こんなにしんどい朝は今までになかつた。学校にはいつ

もよりすつごく早く着いた。何なら一番乗りだった。なんで早く来ちゃつたんだろうなつて思いつつも教室にいた。しばらくしてから愛花も来た。けどあいさつする気にもなれなかつた。すつごく気まずかつた。「おはよー優花。やつぱり昨日のことで後悔とかしてるよね。」麻希だった。確かにそうだけど、もうどうすればいいかわかんない。「大丈夫だよ。二人なら仲直りできるつて。」そんなこと言つてたけどほんとかな。全然仲直りできる気がしない。自分にできる気がしない。何すればいいかわかんない。何もする気起きないし、何もわかんない。家帰つてからも昨日みたいに何も手を付けずにずっと部屋にこもつてた。いつもなら「やつたー! 明日休みだ! 何しよつかな。」つてめっちゃ浮かれてるんだけど。お姉ちゃんもまた心配して「ほんとに大丈夫? 風邪でも引いた?」つて言つてきた。「別に今日もちよつとだけ嫌なことあつただけ。軽いことだから。」つて適当にやり過ごした。何もわかんない。どうすればいいんだろ。なんて言つたら許してくれるかな。不安ともやもやが混ざつて重くなつて自分を押しつぶしてるような気がした。こんなに考えててもわかんないや。とつとと寝てしまえば楽になれるかな。そう思つて今日も早めに寝た。

次の日、お姉ちゃんに「あんたなんか変だよ?」なんか沈むことでもあつた? 気分転換に商店街とかどっか出かけてきたら?」つて言われたから近くの商店街へ来た。レストランで料理食べて適当に過ごしてると外に愛花がいた。なんか知らない建物に入つてた。そこにはへこコロの休憩所へつて書いてあつた。しばらくすると愛花が出てきてすんごい晴れやかな顔で帰つてた。自分もあそこに行つたらもやもやがなくなるかなつて思つて、レストランの会計を済ました。店に近づくとき中にいた女性の人が「あら、また困つてることがあるのね。どうしたの?」よかつたら話聞くよ。」つて言つてきた。「どうぞ入つて。」おじゃまします。」中はすつごくきれいだった。緑が多いなつて思った。「私は心愛。悩んだりしてる人の心が少しでも軽くなつたらいいなと

思つてカフェを開いたの。」「なるほど。えつと…自分のも相談していいですか?」「もちろんいいよ。何か教えて。」自分はあの日のこと、全部話した。あいづちうつてくれて、話しやすかった。そのせいかどんどん話してた。「なるほどね。声荒げちゃったのか。でも、つい感情的になっちゃうことってあるよね。」「心愛さんは否定しなかった。自分で自分のこと嫌になつてたからすぐうれしくて、すぐ心の広い人だつて思つた。」「ちよつと待つて。」そう言う、奥のほうのキッチンへ行つた。ちよつとしたら戻つてきて、私に黄色っぽい紅茶みたいなを出してくれた。」「これつて何ですか?」「これはハーブティー。カモミールだよ。カモミールはイライラを抑えたり、リラクセスさせる効果があるんだ。」「今の自分にぴつたりだつて思つた。」「いただきます。」「カモミールティーはお花っぽいフローラルな香りとかの甘みがした。」「もし自分が感情的になつたり、なりかけたときは一回心をなだめて落ち着かせよう。それで自分の気持ちを正直に言おう。言い方によつて感じ方も変わつてくる。相手に向き合えるように優しい口調で話すと相手も納得してくれると思うよ。」「あの時のお姉ちゃんの言葉と似ている。確かにそうすればいいのはわかる。でも…。」もし、どうやつて落ち着かせたらいいかわからないつて時があったら、深呼吸しようつて思えばいいんだよ。具体的にこんな行動するだつたらわかりやすいからね。」「確かに深呼吸ならできる気がする。まずは深呼吸、まずは深呼吸、まずは深呼吸…。これに慣れてけば簡単に落ち着かせられる気がしてきた。」「深呼吸したり、このこと思ひ出したりして、自分の心を落ち着かせるの。そしたら、あとは整理する。頭の中がごちゃごちゃのままだったら、何にも分からなくなつちやうからね。その中から自分の言いたいことを考えていけばいいんだよ。」「なんか一気に道が開けた気がした。心愛さんすごつてなつた。頭の中がごちゃごちゃだったらそりゃわかんないよね。深呼吸する、整理する、結論を出すの3ステップ。こうやつて覚えれば対処できる

のか。」「ありがとうございました。おかげでこれからうまくいけそうな気がします!」「そっか。よかった。また思い出してね。」「はい!」「優花ちゃん、愛花ちゃんと絶対仲直りしてね。」「します!」「そう言つてここを立ち去つた。でも不思議なことがちよつとあつた。なんで名前知つてたんだろう?愛花が言つてたからかな?なんか心読まれてるみたいだつてちよつとだけ思つた。でもここに来てよかった。もやもやはもう消えていた。

「つてことがあつたんだよね。」「なんかめつちや私と似てるじゃん!てかほぼ一緒なんだけど。」「ほんとに!?やつぱなんか謎の運命みたいながあるのかな?」「ほんとにそうみたいだよね。」「気づいたらまたいつも通りに戻つた。やつぱり麻希の言うとおりだったな。二人でまた笑いあつた。

2回目の社会科見学の授業の時間になつた。その時に二人で謝つた。」「あの時は本当にごめん。二人とも自分勝手なことしてた。今はもう話し合えて落ち着いたけど、本当に迷惑かけてごめん。」「全然いいよ。対立することもたまにはあるよ。それに、仲直りできたならよかった。」「みんなそう言つてくれた。」「それで、話戻すけど回り方、二人の意見いとこどりすればいいんじゃない?」「麻希が言つた。」「どうやつて?」「分かれるのを複数人にするんだよ。ここは5人だから3人と2人で分ければいいの。こうすれば複数だから優花のいう安全性も少しは取れる。そのうえ効率もよくなる。」「めつちやいいじゃん!」「2人ともすつかりいつもの調子に戻つてるね。」「この日の話し合いはスムーズに進んだ。」「はい、ここまでです。皆さんとても有意義な話し合いにできたことでしょう。実際に見学に行くのは来週の木曜日なのでみんなでもう一度確認しますから、覚えておいてくださいな。」「先生の声で授業が終わつた。前と違つてみんな笑顔だつた。

前と変わったのは二人ともよく考えて行動できるようになつたとだ。対立しそうになつた時はお互い立ち止まつて考えてる。だか

ら間が生まれる。その時に面白くなって笑ったりすることもあったけど、よりいい方向に進むようになった。前より成長できたなって思えるようになった。「そうだ！心愛さんにお礼言いに行かない？」「賛成！それじゃ今日の放課後、一緒に行こー！」

実際にあの商店街に行った。でも、あの場所に〈ココロの休憩所〉はなかった。元の空き地に戻った。「あれ？おかしいな。あれが幻覚だったはずがないのに。」「不思議なこともあるもんだね。」「そうだ！ないなら自分たちでやればいいんだ！」「なるほど。それめっちゃいいじゃん！」「じゃあ、将来2人で〈ココロの休憩所〉やろうよ！約束だからね！」「うん。絶対。」

あれから10年後、私たちは商店街のあの場所に〈ココロの休憩所〉を開いていた。毎日いろんな人が相談に来る。私達はいつもその人たちの悩みとかを聞いて、それに合ったハーブティーと共にアドバイスをしている。中にはハーブティーとか飲みに来るだけの目的で来てる人もいた。あの日の私達みたいに友達関係で困っている学生も来た。「もし、対立しちゃったときは、一回落ち着いて、頭の中を整理してみるんだ。そして言いたいことを見つけ出す。正直にこうだからこんなことになったって言った方が向こうも納得してくれるよ。」って、こんな風にアドバイスしてる。自分たちがあの日心愛さんに言われたみたいに。そしてこれは自分たちの仲の良さの秘訣でもある。この考え方を大事にしてきたから、今でも信頼できる関係にあるんだもん。相談してくれた学生も「ありがとうございます！すぐ心が軽くなりました！」って言ってくれる。こうやってお客さんが笑顔になってくれると自分たちもうれしくて、笑顔になる。

いつの間にかこの場所は大人気になっていて、この商店街のシンボルの存在にもなった。テレビがきて、へ日本の中でも笑顔あふれる商店街として取材も受けた。「なんか気づいたら忙しくなっちゃったね。」「今日はどんな人が来るかな。」「また、いろんな人と話したい

ね！」「じゃ、今日も準備しよっか。」「うん！」なんてことを話しながら、今日もハーブティーの用意を始めた。

